

1 参加の動機

勤務校（東京都北区立浮間小学校）の校庭は、23区内にしては広い。地域の特色であるサクラソウ専用の「桜草園」、各学年専用の畑。ヒキガエルやメダカなどがすむ「うきうき池」。それにつながるうきうき棚田」には少数ではあるが、トウキョウダルマガエルも生息している。さらに「うさ山」にはウメ、ビワなど実を付ける木が多く植えられている。児童は1年を通して豊かな自然環境の中で生活しており、自然、昆虫や生き物に興味をもつ児童が多い。各学年、生活科や総合的な学習でこれらの環境を活用しているが、教職員にとって児童の安全の為に自然環境を維持・管理する時間が十分にとれず、今行っている活動からなかなか新しい活動に広げられないという課題がある。また、近年ハチの増加やガの幼虫の大量発生などの問題が起こったり、夏季に気温が高すぎて屋外での活動を控えたりと予定していた活動が行えないこともある。プログラムに参加することにより、昆虫や生き物、植物との触れ合いや観察からよりよい環境づくりや新たな活動に段階を進めるためのヒントを得たいと考え、このプログラムに応募した。

2 調査内容

- (1) 調査エリア（菊川市千榎）の茶草場や棚田などで昆虫を探す。
 - ・捕虫網や吸虫管で昆虫を採集する。
- (2) 捕獲した昆虫を分類する。
 - ・分類された昆虫は、後日ミュージアムで研究者により整理・記録される。

3 調査活動で得た知識を活用した授業実践の概要（第1学年）

- (1) 生活科：「うきうきたんけんたい むしをさがそう」

① オンラインによる全体指導

第1時では、1年生6学級（通常級5学級・特別支援学級1学級）をオンラインでつなぎ、筆者が7月のチーム3で体験した活動（ふじのくにミュージアムの展示やバックヤードの見学や岸本教授のレクチャーなど）を報告し、校庭のどんなどころにどのような昆虫がいるのかを探しに行くことを伝えた。事前に教員が考えていたよりも昆虫に興味をもっている児童が多く、筆者が本調査（チーム4）に参加する予定であることを伝えると、自分たちも「虫博士」になれるよう頑張っ探そうと、意欲を高めていた。今回のような一人の指導者が学年の教室をオンラインでつないで授業を行うのは、初めての経験であった。指導者の一方的な説明になってしまうのではないかと心配していたが、各教室の担任の支援もあり、各教室の児童からの質問や意見の交流ができる双方向の活動にすることができた。同学年の担任達から、「児童が集中して聞けていた。」「いつもより内容に関するつぶやきが多かった。」などの感想が寄せられた。これらのことから、実際に体験してきたことや専門家から指導を受けたことを聞くのは、児童に具体的なイメージを持たせるのに有効であると考えた。



<オンラインによる全体指導>



<校内での観察>

② 観察活動

校庭に続く「うさ山」や「うきうき池」などは日常から児童の遊び場になっている。興味や関心が高い児童は観察前からどこにどんな昆虫が住んでいるのかを知っていた。観察の際にはグループのリーダーとなり、ふだんはあまり里山で遊ぶことが無い児童に昆虫の探し方や捕まえ方を教えていた。12月に行われる展覧会に出品する工作の題材を「昆虫」にすることを伝えていたので、昆虫が苦手な友達には捕まえて触らせてみたり、触ることができない友達には自分が持って羽を広げて見せたりしていた。まとめの段階では、「トンボがうきうき池やプールにいるのは、卵を産みたいからかな？」など、それぞれの昆虫がどうしてそこに住んでいるのかも考えることができた。

③ 図書館との連携

本校の図書室には地域の図書館の司書が週に2日間勤務している。司書に協力してもらい図書の時間に昆虫に関する図書の紹介をしてもらったり、児童が調べたいことについて相談を受けてもらったりした。1年生の教室から図書室は離れていて日常に活用するのは難しいので、区内の図書館の団体貸し出しを活用して昆虫に関する本を約60冊、児童が手に取りやすいように学年のフロアに置いておいた。

(2) 図画工作：「むしむし うきまパラダイス」

「虫たちの楽園を作ろう。」空き箱やラップの芯などを使って、それぞれが思い思いの昆虫を作った。「足は6本だったよね。」「羽は4枚だったよね。」など、ほとんどの児童が観察したことを生かしながら制作を楽しんでいた。カマキリをモデルにした児童は、カマの先がギザギザしていることに気付き、その部分にモールを使って表した。また、展示する台に昆虫達が楽しく暮らしている様子を表現しようと葉や枝などを作って展示した。



<ムシムシうきま
パラダイス>

4 若手教員への伝達

低学年の担任は、日常から昆虫を見たり触れたりすることが多い。筆者が7月のプログラムで見聞きしてきたことを同学年の教員に伝えると、興味深く聞いていた。そして、それぞれの学級で第1時を指導する予定でいたが、オンラインで筆者が全体指導をした方がより、児童の興味や関心を高められるのではないかと提案された。また、当初の計画ではそれぞれの学級で1時間ずつ観察する予定を全学級合同で2時間行うことに変更することになった。このことにより、児童が広い範囲でじっくりと昆虫を探ることができた。

また、12月に若手教員に伝達する機会を得ることができた。プログラムでの活動を報告し、学校の里山の管理や新たな活動について意見を交換することができた。人にとってはちょっとした変化であっても、昆虫や植物にとっては大きな変化になってしまうこともある。そして一度失われてしまった環境を取り戻すのは難しいことである。特に再来年度に校舎を増築するための工事が予定されているので、今後も知恵を出し合いたい。

残念ながら、今回、昆虫を扱うプログラムには進んで参加したいと考える若手教員は少なかった。暑い中での活動や吸虫管を使った採集に対して苦手意識を感じるようだ。どちらかというとなベテラン教員の方が参加への意欲が高かった。私自身も昆虫を扱うことは得意ではないが、たった2回の参加でも研究者や他の参加者（私以外は昆虫愛好家）たち、茶農家の方から教えていただいたことで里山に住む昆虫や生物、それらを取り巻く環境に対する興味が高まった。近年校庭でのハチの増加やガの幼虫の大量発生などの問題は、近隣の団地の建て替え工事（複数）で住みかを追われたからかもしれないと考えたり、学年の畑の整備をもっと定期的にするの大切さを感じたりすることができた。プログラムへの参加は難しくても、身近にある学校の里山にいつも一人一人の教員が目を向けていくことがよりよい環境や教育活動につながるのではないかと考える。



<校内 OJT 研修会>

5 最後に

今後も持続可能な社会の実現に向けた環境教育を勤務校でどのように取り組めるか、研究者からご助言をいただきながら学んでいきたい。今回貴重な機会を与えてくださった松下幸之助記念志財団様をはじめ、アースウォッチ・ジャパンの関係者の方々、そして、現地でご指導いただいたふじのくに地球環境史ミュージアムの岸本年郎教授、早川宗志准教授、お世話になった倉沢園様、ボランティアの皆様にご感謝申し上げます。